

おすすめするようではない本

多鹿 智哉 准教授
(経済数学)

『詭弁論理学』野崎 昭弘著

中央公論新社 1976年

おそらく学生のみなさまに向けた文章ということで、大学生当時の筆者自身が読んでいた書籍の範囲でおすすめを書こうと思い立ちましたが、なにぶん当時は図書館で借りるか、青空文庫などでダウンロードした文章を電子辞書（当時スマホやタブレットはなかった一方、電子辞書は多機能であった）に入れて読むというスタイルでしたので、当時どんな書籍を読んでいたかほとんど記録にも記憶にもありません。本書は其中で確実に筆者が当時読んでいたという記憶があるものです。本書は様々な（詭弁）論法や論理・数学パズルについて知的に、軽妙に語る、長く読まれている名著です（2017年に改訂版も出版されています）。紹介されている数学パズルは今では有名なものも多く、多少古びてしまった本書ですが、現代の「ソフィスト」たちによる騙る弁論や詭弁・強弁が蔓延るこの時代で本書を読めばそれを知的に笑って楽しめるようになることでしょう。

『スピヴァック多変数の解析学—古典理論への現代的アプローチ』

M. スピヴァック著；斎藤 正彦訳
東京図書 2007年

大学院レベルの経済学を学ぶには解析学が必要だと思った筆者が図書館で読んでいたもの（のひとつ）が本書です。原著初版は1971年、薄くコンパクトにまとまっている名著です。扱っている内容はベクトル解析の初歩的な内容ですが当時の筆者にとっては非常に難易度の高いものでした。1日かけて2、3ページも進まず、それも行ったり来たりしながら行間を埋めたり練習問題を解いた思い出があります（数学書を読むときにはよくある）。翻訳も特徴的で、普通は「微分可能」や「連続微分可能」と訳すところを「可導」や「強可導」とマネしたくなるような（マネしてはいけない）カッコいい用語を割り当てています。現在は絶版で、今では同じ分野を学ぶのにずっと良い書籍もあると思いますが、そういった書籍に触れられるのも図書館の良いところですね。

『ペトロス伯父と「ゴールドバッハの予想」』A. ドキアデイス著：酒井 武志 訳

早川書房 2001年

こちらは数学者を扱った小説です。舞台はギリシャ、主人公が田舎に住む、実はかつては高名な数学者であり 300 年来の未解決問題・ゴールドバッハ予想に挑んでいたペトロス伯父さんの記憶をたどる物語です。応用数学を研究していたこともある著者による実在の数学者を交えたフィクションです。実在の数学者、クリストス・パパキリアコプーロス博士がモデルともいわれますが、実際に交流した人のエッセイなどを読む限りではおそらくパパキリアコプーロス博士はこんな人ではない。学者を扱った小説やフィクションは単なる奇人・変人伝になりがちですが、本書はそう言ったものでなく、まるで実在の人物の伝記のような物語になっています。筆者が読んだときにはこういう研究者にはなるまいと思ったものでした。

筆者自己紹介

多鹿 智哉 (たじか ともや)

2017年 博士 (経済学) 神戸大学

代表的な論文の日本語解説はこちら

(<https://sites.google.com/site/tomoyatajika90/jpn/ntsummary>)